

より右上腕頭側に皮下腫瘍を自覚。徐々に増大してきたため、近医を受診し、同部位の針生検で腺癌の診断であった。副乳癌を疑い、当科紹介受診。【既往歴】なし。【所見】右上腕の腋窩近傍に2 cm 大の弾性硬、表面皮膚やや引きつれる皮下腫瘍あり。体表超音波では腋窩と連続性のない皮下組織に14.8 mm の腫瘍を認めたが、腋窩リンパ節腫脹や乳腺腫瘍は認められなかった。マンモグラフィーでは両側カテゴリ1、乳房MRIでは両側乳房に異常所見はなかった。【治療経過】摘出生検を施行。病理所見では真皮下層から皮下脂肪層にかけて頭腺管様構造を呈する15 mm の浸潤性腺癌であるが、明らかな乳腺組織は認められなかった。(ER-, PgR-, HER2 3+, Ki67>15%)【結語】鑑別診断として汗腺癌、エクリン腺癌、乳癌が挙げられる。また免疫組織化学的検討の結果から転移性腺癌の可能性も否定できないため、画像的な全身転移検索をしたがいずれも悪性所見は認められなかった。診断に難渋した症例を経験したので報告する。

7. 乳房 MALT lymphoma の一例

荻野 美里¹、鯉淵 幸生¹、常田 祐子¹

小田原宏樹^{1,2}、堀口 淳³

(1 高崎総合医療センター

乳腺内分泌外科)

(2 東邦病院 外科)

(3 群馬大医・附属病院・乳腺・内分泌外科)

【症 例】65 歳女性。【現病歴】右乳房腫瘍を自覚し、前医受診。US・MRI で乳癌が疑われ、当院紹介受診となった。【所 見】視触診では右乳房 A 領域に1.9 cm 大の硬結。MMG では右乳房にFAD。US では硬結に一致して2.0 cm の低エコー域を認めた。MRI では造影効果の強い腫瘍であった。針生検では乳管間や小葉間から周囲脂肪層にかけて異型リンパ球の浸潤を認めた。MALT リンパ腫や偽リンパ腫などが鑑別にあげられたが、確定診断は困難であった。針生検で悪性リンパ腫が疑われたため、他病変の有無につきFDG-PETCT を施行した。右乳房腫瘍以外に大腸への集積を認め、精査の結果、高度異型大腸腺癌の診断であった。【経 過】右乳房腫瘍は精査の間の2 か月で2.5 cm に増大し、診断も兼ねて摘出術を施行した。病理結果は、異型リンパ球が密に浸潤し、腫大したリンパ濾胞もみられた。異型リンパ球はCD20 陽性で、LEL, follicular colonization などの存在からB 細胞リンパ腫で、MALT リンパ腫と診断された。大腸病変のこともあるので、化学療法は行わず、現在は血液内科で経過観察中である。【まとめ】極めて稀な乳房 MALT lymphoma の一例を経験したため文献的考察も含めて報告する。

〈セッション3〉

【治療：QOL】

座長：久保 和之（埼玉県立がんセンター 乳腺外科）

8. T-DM1 治療経過中に発症した原因特定困難な間質性肺炎の1例

小松 恵¹、永井 成勲¹、高井 健¹

久保 和之²、戸塚 勝理²、林 祐二²

松本 広志²、大庭 華子³、黒住 昌史³

井上 賢一¹

(1 埼玉県立がんセンター 乳腺腫瘍内科)

(2 同 乳腺外科)

(3 同 病理診断科)

【はじめに】近年の抗体薬の開発により、HER2 陽性転移・再発乳癌の治療体系は大きく変化し予後の改善も著しい。いくつかの大規模臨床試験の結果、T-DM1 はHER2 陽性転移再発乳癌の2 次治療における標準治療となり、3 次治療以降においても有効な治療である。当科では2014 年1 月から2015 年11 月までに、55 人の患者にT-DM1 を投与した。その中で、原因特定困難な間質性肺炎を発症した症例を経験したので報告する。【症 例】他院で右乳癌(病期不明)に対し、術前化学療法ドセタキセル→EC 療法を施行後、乳房部分切除術+腋窩リンパ節郭清術を施行した。病理学的治療効果はGrade3 で、放射線療法施行後に、術後タモキシフェン内服とトラスツズマブを投与された。手術より5 年10 ヶ月後に肺肝転移が出現した為、当科に紹介された。1 次化学療法でドセタキセル+ペルツズマブ+トラスツズマブ8 コース後にPD となり、1 次治療としてTDM1 を投与した。15 コース後に左肺のみ間質性肺炎を発症した。呼吸器内科にコンサルトし、原因として感染性や薬剤性、強皮症治療中であり膠原病性も疑われた。気管支肺泡洗浄も施行したが原因は特定されず、確定診断には至らなかった。ステロイドパルス療法+抗生剤投与による治療を開始し、その後、呼吸器症状は安定した。在宅酸素導入で退院し、一定期間の経過観察後、現在、乳癌に対してはHP 療法を行っている。

9. 乳癌肝転移に対してパクリタキセル・ベバシズマブ治療後エベロリムス投与にて著明な肝萎縮をきたした2例

蓬原 一茂、柿沢 奈緒、鈴木康治郎

吉沢あゆは、力山 俊樹

(自治医科大学附属さいたま医療センター

一般消化器外科)

パクリタキセル・ベバシズマブは奏効率の高い治療として肝転移症例に使用されるが、病勢進行後の治療は未だ不明である。私達はER 陽性乳癌の肝転移症例に対してパクリタキセル・ベバシズマブ治療後エベロリムスを選択する